

福崎町文化

第38号 令和4年3月3日 兵庫県神崎郡福崎町福田176番地の1 福崎町文化センター発行



稚児文殊 松岡映丘画
福崎町立柳田國男・松岡家記念館蔵

江戸期における福崎の俳人たち

俳書・俳額調査を中心として

常民学会代表 難波正司



はじめに

いにしえの時代より播磨は豊かな地であり、特に近世の庶民文芸のなかで大きな位置を占める俳諧とゆかりが深い土地柄でもあった。「俳聖」と称された松尾芭蕉翁は、貞享五年（一六八八）四月下旬に兵庫より須磨・明石まで訪ね、その紀行『笈の小文』の旅で、

月はあれど留守のやうなり須磨の

秋

蛸壺やはかなき夢を夏の月などの名吟を得ている。この旅から十年後、丹波生まれの女流俳人として著名な田捨女は、播州網干の龍門寺で没している。さらに、小林一茶は寛政七年（一七九五）春に讃岐からの帰路、山陽道を有年おきなから斑鳩いばら書写、姫路城下を経て曾根、高砂へと向かっている。高砂では松岡青蘿

門の田中布舟亭に泊まり、

先しるき前の池哉さくら哉

と詠んでいる。このように、播磨は名高い俳人との関わりをもった地なのである。

一八世紀に入り、全国的に俳諧が流行したとき、ここ播磨においても例外ではなく、有力な俳人が各地に陸続と輩出している。姫路では井上千山・寒瓜かんか父子にはじまる風羅堂一派があり、また加古川では少し時代は下がるが、松岡青蘿・玉屑たませつらによる栗の本一派が勢力を誇り、これらは江戸期の播磨における二大俳壇であった。

風羅堂一派は、芭蕉翁の高弟広瀬惟然が元禄年間に来姫したのを期に、千山らの姫路城下の俳人がこぞって蕉門に入門したのにはじまる。惟然の没後、彼が翁より譲り受けていた遺品は千山が引き取ることとなった。芭蕉翁像と翁の遺品とされる簑、笠などである。それらの什物は一派の象徴となり、現在まで延々と受け継がれている。

もう一つの俳壇である栗の本一派は、松岡青蘿にはじまる。京の与謝蕪村らとともに蕉門中興俳諧六大家の一人に数えられる青蘿は、芭蕉翁を仰ぎ蕉風俳諧の復興に尽力した。青蘿とその数三千といわれる門人たちは、数々の俳書を刊行し、また芭蕉翁句碑を建立したりと精力的に活動した。青蘿没後、栗の本の号は玉屑・梧庵こあん・可大・必山らへと明治初期まで受け継がれていくこととなった。

この二大俳壇は播磨全域に勢力を誇り、現在の福崎町にも当時の俳書に入集したり、俳額などに名を残した俳人は少なからずあった。本稿では、福崎で活躍した江戸期の地元の俳人について、風羅堂一派と栗の本一派の俳書それに寺社に残されている俳額の調査などから近世福崎俳諧史の素描を試みたいと思う。

俳書に散見される福崎の俳人

福崎地方で俳諧を嗜む人が俳書に登場する比較的早い例は、風羅堂系の俳書である千山編『印南野』（元禄九年、千山序・来山跋、播陽書肆井上板）においてである【表I】。同書によれば、福崎では西治村の風聲・一葉・不省、福田村の味愈あじよしそれに高橋村の不及の名が見える。彼らの発句を「四季之発句時節前後」から幾

つか紹介しよう。

樽なけて水かけ合や夏のくれ

西治村 風聲

簑を干所にそあれ河柳

同 一葉

夏野にもまきはせぬかはなし牛

同 不省

一昨日の雨もて来るや初桜

フク田村 味愈

村雨にも、の口とく木わた哉

高橋村 不及

また、同書において千山と西治村

の風聲は溝口村の可侯を加えて三吟

半歌仙を巻いている。表六句を示す。

見合てふんとはつす夏野哉

風聲

管かたひらの汗くさい事

千山

窓の月居ながらそこに假寝て

可侯

や、茸の焼過る也

聲

とも舟をさしおくれたる秋の風

山

こくとく道の案内とふ人

侯

千山編『花の雲』（元禄一五年、誠

齋序、鳥落人跋）にも西治村の風聲

が七句、一葉が一句、高橋村の桃雫とうじく

が一句、合計九句が入集している。

各人一句ずつ示す。

【表 I】江戸期の風羅堂系の俳書に見える福崎の俳人

俳書	出版年	福崎の俳人
千山編『印南野』	元禄9(1696)年	風聲・一葉・不省(西治)、不及(高橋)、味愈(福田)
千山編『花の雲』	元禄15(1702)年	風聲(西治)、桃雫(高橋)
惟然編『二えふ集』	元禄16(1703)年	風聲(西治)
千山編『當座拂』	元禄16(1703)年	風聲(西治)、闇烏(新町)、桃雫(高橋)
布流編『又花の雲』	宝永2(1705)年	風聲・拳桃(西治)、桃雫(高橋)
千山編『俳諧みの塚』	正徳2(1712)年	風聲・拳桃(西治)、寸竜・豊風(井ノ口)、闇烏(新町)
旦海編『鹿子の渡』	享保7(1722)年	風聲・拳桃・橋古・つね女(西治)
寒瓜編『雪の棟』	延享元(1744)年	風聲・むら・拳桃・桃雨・里桃・野艸・沙明(西治)、桃牛・拾禾・夫丸・子鳳・小汐女(吉田)、賤一・丹之(新町)、梅月(長日)、素牛・梅玉・拾男(八反田)、桃醉・夫若(辻川)
寒秀編『花実巻』	延享4(1747)年	風聲(西治)、竹秋亭丹鶯(新町)
寒瓜編『簞のいしぶみ』	寛延3(1750)年	丹鶯・有之(新町)、風聲(西治)
寒瓜編『五々の冬』	寛延3(1750)年	丹鶯・鳳鶯・哲髯(新町)、風聲【八十翁語と記す】・野艸(西治)
丹頂堂寒瓜歳旦帳	年号不詳	桃醉(辻川)、麦笛(福田)
寒秀編『障子昏』	宝暦2(1752)年	丹鶯(新町)
千明編『時雨會集』	寛政11(1799)年	一貫(西谷)
千明編『風羅念佛集』	享和3(1803)年	竹葉(余田)

蓮の実の飛や時々ちよんぶりと

西治 風聲

はつ霜やとちらむいても海の上

高橋 桃雫

はるさめにさはは碁盤の置所

西治 一葉

芭蕉翁の高弟鳥落人(広瀬惟然)の来姫ののち、千山ら地元の俳人は

惟然調いわゆる口語調俳諧に傾倒していった様子が同書から窺える。し

かし、この惟然調は一時期のことであり、千山自身も晩年には蕉風の俳諧に落ち着くこととなった。

福崎の俳人が最も多く入集している俳書は、寒瓜編『芭蕉翁半百忌

雪の棟』(延享元年、京の井筒屋庄兵

衛刊)であり、芭蕉翁五十回忌に播磨國増位山山麓に風羅堂を建立し、

磨國増位山山麓に風羅堂を建立し、

翁の命日に法筵百韻を催した折に編

まれた書である。同書によれば、西

治村、辻川村、八反田村などの俳人

が入集し、また風聲の発句ではじま

る半歌仙を巻いている。表六句を示す。

ころふまで雪見の走か簑笠か

西治竹翠軒 風聲

雲こからしに散て夕月

寒瓜

紙に濂ものた、く音淋しくて

サイチ 桃雨

なまるといへハそちになまるハ

シン町盲人 賤一

乗合の咄し腰折ほとときす

サイチ

岩の間から水汲て出る

ミツクチ

また、同書に入集している十五人の俳人の発句を一句ずつ紹介しよう。

鳥ひとつ眠て居るや塚の霜

サイチ

伊達もなく世そ打抜く枯尾花

風聲

夢そ夢そ月ハ枯野に照ながら

同 野艸

けふそア、五十年の夢の帰花

同 里桃

山川の無事や枯野の夢の杖

同 沙明

同 桃雫

そき袖の時雨やむかし物かたり

同風聲妻 むら

見よけふも雪に其名ハ埋もれず

シン町 丹之

蓋とれハどこの木の葉そ旅硯

同盲人 賤一

観すれハ粟炊く間そ月の霜

ヨシタ 夫丸

在スなら誉やう問て冬の月

同 子鳳

音なくて世に鳴や雪の簑と笠

同 小汐女

左右より中にも高し雪仏

辻川 桃醉

つたへ聞この簑笠や雪のさな

八反田 梅玉

手を結ふ石に尊し苺の霜

同 拾男

見よやそも道踏あけし雪の杖

同 素牛

『印南野』、『花の雲』、千山編『俳

諧 みの塚』(正徳二年、千山序、

城西散人跋)、『芭蕉翁半百忌 雪の

棟』、寒瓜編『簞のいしぶみ』(寛

延三年、能移序、子竜跋、寒瓜跋)

など数々の風羅堂系の俳書に登場す

る俳人がいた。西治村の風聲(別号

は竹翠軒)である。ところが、彼は

生没年ばかりでなく通称も明らかで

ない。彼の生没年は確定できないが、

寛延三年(一七五〇)に寒瓜が編集

している『俳諧五々の冬 春曙庵追善』（寒瓜序、盾山跋）に入集している彼の発句に、

空十方花と手向や雪の艶

西治八十余翁 風聲

とあることから、生年は一六七〇年代頃であり、没年は同書に「西治八十余翁」とあり、それ以後の俳書に彼の名を見出せないことから一七五〇年代頃と推測される。また、風聲は元禄九年（一六九〇）の『印南野』にはじめて入集しているので、句作をはじめたのは二十代後半のことであり、妻のむらとともに俳諧をたしなんでいたことが窺える。千山・寒瓜父子らと俳交を重ね、この地方における俳諧の指導的立場にあつたと思われる。特に、風聲の出身地の西治村からは、妻のむら・一葉・不省・拳桃・橘古・つね女・桃雨・里桃・野艸らの俳人が数多く輩出している。天明期（一七八一〜八八年）になると、加古川の松岡青蘿を祖とする栗の本の俳系が勢力を誇るようになった。まもなく有力宗匠となった青蘿は、寛政二年（一七九〇）、蘭更とともに京の二条家俳諧の宗匠に抜擢された。ついに彼は俳諧師として最高の榮譽を得たのである。二条家俳諧とは、京の二条御殿に俳人が召されて二条家当主の発句をいただき、

召された連衆で連句を巻くというものである。それは寛政二年に暁台が宗匠に召されたのはじまり、彼はその二回目の「紅葉の御会」に召された。『二条家御俳諧記』には「続いて播磨青蘿・京東山高桑蘭更、被召出蒙宗匠免許。同十月十六日、青蘿御会を勤」とある。青蘿は二条家俳諧宗匠として、玉屑・五齡・李雨・梅居・蝸国・五栗・桃睡・松溪・右契・瓜涼・布舟ら栗の本一門を引き連れて京に上つたのである。その折に、かねてから親交のあつた福崎新町の志水五艸宛に書簡を送っている。御手昏恭致拝見候。先以霜寒甚御座候節弥御清福被成御暮奉珍重候。然ハ此度二条殿下御俳いかも首尾よく候。十六日御興行有之。殊外評判宜大慶いたし候。貴兄御事も御名代を則御免許下され候。無程我等持参可仕候。随而為御祝儀金子二百疋遠路御恵投忝受納いたし候。近日帰郷之上別々可申述候。以上

十月廿日

青蘿

五艸様

（『福崎町史』第四卷資料編Ⅱ）

右の青蘿の五艸宛書簡によれば、青蘿は京に上り、十月十六日に二条家俳諧興行「紅葉の御会」で宗匠を

務め、「評判宜大慶いたし候」だったと記している。当書簡には年号がないが、青蘿が二条家俳諧興行の「紅葉の御会」で宗匠を務めたのは寛政二年（一七九〇）のみであるので、この年の十月二十日発信の書簡と考えてよいであろう。御会の開催には、二条家への「御館入御賄金」として、必ず金銭の授受があつた。二条家が俳諧免状を出し、青蘿と同行した連衆もその分に応じた金子を献じたようである。五艸も京に上っている青蘿に「金子二百疋遠路御恵投」したようである。

また、栗本玉屑の五艸宛書簡（日付は十五日とのみ記載してあるが、俳諧興行日の前日の発信とは考えられず寛政二年九月十五日と推定され、青蘿書簡と同じ年か）には、
・・・〈前略〉・・・二条様御事、弥此節蕉門俳諧御取立、江戸へも御沙汰有之、暁台宗匠相済、尾州より門人卅人はかり登り申候而、河原御殿二而御会御座候。然処先尾播宗匠を以俳諧式等諸事被為及御相談、諸事諸大夫へ引合、宗匠二思出趣暫処御延引願参候。・・・〈中略〉・・・委細之儀御面上、右御殿二出申かたき人ハ名代を立御免状を宗匠受取相渡し申事、何分書面ニハ申上かたく候。少も山

かかりたる事ハ無御座候。右様御承知可被下候。頃日御恵借之品ハ御目かかり御返納可仕候。早々以上

十五日

五艸様

貫下

玉屑

夫ニ付少し御祝銀も仕事、是も暁台、青蘿子之了簡也事。

（『福崎町史』第四卷資料編Ⅱ）

とあり、暁台宗匠は寛政二年九月五日の二条家俳諧興行に尾州（尾張）より門人三十人ばかり引き連れて京に上つた。京では播磨の青蘿宗匠と俳諧の諸事について相談したようである。前出の青蘿書簡と照らし合わせると、五艸は俳諧興行には参加せず、「御殿二出申かたき人ハ名代を立御免状を宗匠受取相渡し申事」と、代理人を出して俳諧免状をもらったようである。

二条家俳諧興行の翌年の寛政三年（一七九一）に、再び青蘿は三月十日の「花の御会」で宗匠を務めた。その後、師匠の青蘿が三眺庵で容体が悪化し、六月十五日には五艸は福崎から加古川に駆けつけ、師の身の回りの世話にあたった。その様子は『水の月』（寛政三年冬、不木序、蘭更跋）所収の玉屑筆「青蘿居士終焉



【図1】『水の月』表紙と「青蘿居士終焉記」

記」に、

十五日より淡路の我白・兵庫の岩
苔章古・姫路の花瓦宗居・劍坂の
花樵・米五・福崎の五艸・三木の
如鏡など庵中詰て起居を助く。各
心神にかけて祈禱をなす、ほ句と
も多し、中にも木水老人か吟桃岐
持来りてよみあけたり

涼風に雲吹はれて水の月 木水
こゝろひとつに夏の朝貌

と言下に脇ありしは十六日の朝な
り。次第に頼みすくなく、終に十
七日午の刻はかり、正念にして燈
の消るかことく息風絶ゆ。
とあり、五艸は各地から参集した門
人らとともに「起居を助け」、青蘿

の最期を看取ったようである【図1】。

その後、初七日の六月二十二日に加
古川寺家町の光念寺で興行された「追
善之俳諧根本式百韻」に連衆として
参加し、追悼の句を「亡師終焉を傷
る句初七日迄」（『水の月』所収）
のなかで、

面影や四海に照りて夏の月

福崎 五艸

と詠み、師の青蘿の死を悼んだ。

青蘿没後、栗の本の号を継承した
玉屑とも引き続き俳交を重ねた五艸
は、玉屑宗匠ら栗の本系の俳人らと
ともに、京の二条家俳諧興行の花の
御会（寛政五年四月十四日、同六年
三月二十六日、文化八年四月七日）
に三度も連衆として名を連ねている。

志水五艸は栗の本系の俳人として、
しばしば俳書に登場し、一八世紀後
半から一九世紀初めにかけて青蘿・
玉屑宗匠からかなりの評価を受けて
いた俳人だった。彼の幾つかの句を
俳書から示そう【表Ⅱ】。

飛石に香のこほれけり雨の梅

（元智編『蓬萊帖』）

薄雪や又なつかしきあらし山

（李雨編『骨書』）

あざやかにむくげ花咲く且哉

（一茶編『たびしうゐ』）

名月に光りにすけり海の底

（玉屑編『散はな』）

散花の皆鮎となるか大井川

（玉屑編『湯のはな集』）

【表Ⅱ】江戸期の栗の本系の俳書に見える福崎の俳人

俳書	出版年	福崎の俳人
兩人編『秋しぐれ』	安永元(1772)年	呑口・仙魚(新町)
李雨編『骨書』	天明7(1787)年	五艸(新町)…志水氏
元智編『蓬萊帖』	天明8(1788)年	五艸(新町)
玉屑編『水の月』	寛政3(1791)年	五艸(新町)
玉屑編『道の燈かげ』	寛政5(1793)年	五艸(新町)
一茶編『たびしうゐ』	寛政7(1795)年	五艸(新町)
玉屑編『散はな』	寛政7(1795)年	五艸(新町、白鷗(大貫))
玉屑編『湯のはな集』	文政元(1818)年	五艸(新町)
玉屑編『あふち日記』	文政2(1819)年	五艸(新町)

俳額に見える俳人

絵馬の一つに俳額（俳諧額）があ
る。俳額には、地域から発句を募つ
た句合奉納額、特定の俳句結社（風
羅堂など）を中心とする句合奉納額、
俳号の継承を記念した奉納額、立机
を記念した奉納額など様々な性格を
持っている。この地域には、雑俳や
風羅堂系の結社を中心とした奉納額
が比較的多い。

福崎地域以外の俳額であるが、神
河町中村の法楽寺には四面の俳額が
あり、その中で地元の俳人の名を散
見できるものがある。「奉納金楽山
観音堂」と題された享保二一年（一

七三六）在銘の俳額（縦五三、幅一
九九センチ）では、福崎の北の屋形

村（市川町屋形）の寒嵩・岸山・一
柳・鶯舌・濁水・一風・書水らの名
が見え、川辺村（市川町川辺）の一
亀らの名も見える。また、寛政六年
（一七九四）在銘の「奉納千吟集
折句笠付」と題された俳額（縦四〇、
幅二一六センチ）では、長目村の虎
嘯、福田村の亀翁、板坂村（福崎町
板坂）の指月らの名も散見される。

また、市川町下瀬加の庚申堂には、
享保一〇年（一七二五）在銘の俳額
（縦四三、幅一九五センチ）がある。
撰者は吟耕庵桃牛と記され、彼は寒
瓜編『芭蕉翁半百忌 雪の棟』にも
入集している福崎の吉田村の人であ
ろう。また、当額には辻川の桃酔や
桃軒の名も見える。

福崎にある江戸期の俳額は六面あ
る【表Ⅲ】。その中で現存する最古
の俳額は、福崎町福田の三宮神社に
ある寛政六年（一七九四）九月の銘
がある「折句冠附三千吟集」と題し
たものである。当額は

媚容姘しい鶯が鷹を産

辻川 虎哉

にはじまる五十韻を連ねたもので、
これらは江戸期の娯楽的要素の強い
庶民文芸である雑俳と呼ばれるもの
である。地元福田村の蘭窓・虎直・

【表Ⅲ】江戸期における福崎の俳額一覧

奉納年	撰者(評者)名	所在地	寸法
明和2(1765)年以前	丹頂堂寒瓜ら	福崎町西谷・大歳神社	(亡失)
寛政6(1794)年	地元俳人の五十韻	福崎町福田・三宮神社	50cm×190cm
天保9(1838)年	丹頂堂(守三)ら	福崎町西谷・大歳神社	43cm×195cm
天保11(1840)年	此君・未石ら	福崎町西谷・大歳神社	85cm×194cm
天保13(1842)年	雪洞舎錦水ら	福崎町高橋・広田神社	32cm×180cm
嘉永4(1851)年	風羅堂(守三)ら	福崎町余田・大歳神社	74cm×192cm

孤松・義又らの俳人の名が、墨書された跡からかすかに読み取れる。

その他の俳額についても述べよう。

福崎町西谷の大歳神社には三面ある。天保九年(一八三八)在銘の丹頂堂守三^{もりみつ}らが撰者となったもの、天保一年(一八四〇)在銘の此君や未石らが撰者となったもの、年号不詳の丹頂堂寒瓜らが撰者となったものである。同町高橋の広田神社には、天保一三年(一八四二)の雪洞舎錦水

らが撰者となったものがあり、同町余田の大歳神社には、嘉永四年(一八五二)在銘の風羅堂守三らが撰者となったものがある。これら六面の俳額は、いずれも風羅堂系によった宗匠たちが撰者となっている。すなわち、井上寒瓜(別号は丹頂堂第二世・春曙庵第二世)、葛垣守三(別号は丹頂堂第七世・春曙庵第七世)、雪洞舎錦水、葦屋南楠らである。

おわりに

以上、風羅堂系と栗の本系の俳書と地元に残る俳額を手掛かりとして、江戸期における福崎の俳人についての素描を試みた。

近世の俳諧は一七世紀後半、「俳聖」松尾芭蕉翁によって完成されたものである。わずか一七文字の発句の簡潔さが、当時の庶民には生業の傍らの余技として身近に親しめる文芸として大いに受け入れられたのである。播磨各地にも多くの俳諧宗匠を生み、彼らを中心として俳諧社中や連中が形成され、俳諧人口の裾野を広げた。大坂や京の本屋からは夥しい俳書が出版され、私家版のものも刊行された。さらに、神社仏閣には多くの俳額が奉納されたのである。

俳書に見える地元の俳人について

は、一七世紀末頃から井上千山・寒瓜父子を中心とする風羅堂系の俳書に多く入集している。入集している俳人を村ごとに示すと、福崎では西治村の竹翠軒風聲・風聲の妻むら・一葉・不省・拳桃・橘古・つね女・桃雨・里桃・風偃庵野艸、福田村の味愈・麦笛、高橋村の不及・桃雫、新村(新町)の闇鳥・竹秋亭丹鶯・有之・鳳鶯・哲鶯・呑口・仙魚・賤一・丹之、井ノ口村の寸竜・豊風、吉田村の桃牛・拾禾・夫丸・子鳳・小汐女、辻川村の桃醉、八反田村の素牛・梅玉・拾男、長目村の梅月ら

がいた。
風羅堂系の俳人で、この地方の指導的立場にあったのは竹翠軒風聲(一六七〇頃〜一七五〇頃年)である。千山・寒瓜父子が編んだ数々の俳書に登場し、自らの出身地である西治において妻のむらをはじめ多くの俳人を育てている。

一八世紀後半からは松岡青蘿・玉屑を中心とする栗の本系の俳書にも入集している。俳人の村別分布は、福崎では新村(新町)の志水五艸、大貫村の白鷗、西谷村の一貫、余田村の竹葉らである。

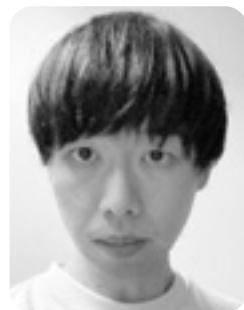
栗の本系の地元の俳人で、特筆すべき人は志水五艸(一七六〇頃〜一八二〇頃年)であろう。五艸は青蘿

の高弟の一人であり、彼の没後、栗の本第二世を継いだ玉屑とも濃密な俳交を重ね、京の二条家俳諧にも幾度も連衆として参列した実力ある俳人であった。

俳額調査から俳人を探っていくと、多くの地元の俳人の名が散見できるが、長い年月で墨痕が薄れ、額面が黒く変色し、また細字のため判読が極めて困難な状態にある。また、絵馬の中でも俳額は地味な存在であるため、大切に保存されることなく近年になって亡失してしまったものも少なくない。しかし、俳額は郷土の俳諧史の研究にとって貴重な第一級の史料であり、後世まで大切に保存されることを切に願っている。

本と、人と、つながる縁

神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程 石橋知之



一 三木家と本をめぐる人々

三木家とその蔵書

播磨国神東郡辻川村には代々姫路藩の大庄屋を務めた三木家が屋敷を構えていました。現在は宿泊・飲食施設となっていますが、今もその遺構を残しています。三木家には江戸時代以来の膨大な古文書群が残されていて、福崎町の歴史を探るうえで重大な手がかりを現代に伝えていますが、古文書の他に蔵書、すなわち古典籍もまた膨大に納められていたといえます。

柳田國男が幼少期、三木家に預けられたとき、同家の蔵書を耽読しその学知の基礎を養ったというの有名なエピソードです。三木家蔵書の内実を記す「観生堂蔵書目録」は約七三〇点四二〇〇冊の書籍を載せており、中には稀少な写本類などもみられます。



(挿図一) 三木家蔵書の一部

それらの蔵書は三木家代々が並々ならぬ努力で蒐集した知の結晶であるといえます。今回はこの三木家蔵書から、本と人のつながりをテーマにお話をさせていただきます。

三木家はどのようにしてこれほどの蔵書を集めたのでしょうか。そもそも、江戸時代とはどのように本が流通しているものなのでしょうか。現代のようにネットショッピングで簡単に本を入手できるわけではありません。また、本は買って読んで終わりではなく、知人に貸すこともあれば、古本として売りもします。本は人から人へ、多くの手を経て循環

していきます。三木家蔵書を題材に「本をめぐる人々の交流」や「江戸時代の本の流通」について考えてみましょう。

三木家から本を借りる人々

ここでは三木家の中でも短命の秀才として知られた七代当主通深（一八二四〜五七）の時代に、彼と彼をとりまく学者や本屋との間で交わされた手紙（『福崎町史』第四巻所収）の内容を取り上げていきます。

三木家には周辺地域の学友や役人、上方や江戸の学者からの手紙が多く残っていますが、その中に篠崎小竹（一七八一〜一八五一）の手紙があります。篠崎小竹は尾藤二洲や古賀精りに学び頼山陽らと交流した大坂の儒学者です。通深とも交流があったようですが、手紙のなかで『東征集』と題された本の借用を依頼しています。

『東征集』とは大坂を代表する学舎懐徳堂の儒学者中井竹山が著した紀行文で、明和九年（一七七二）、竹山が近江宮川藩主堀田出羽守正邦に随伴した折、京都から江戸までの道中で詠んだ漢詩を収録した本です。学問が盛んで本屋も多く立ち並ぶ大坂に住む小竹が、わざわざ遠く離れた三木家を頼るほどですから、簡単に入手できる本ではなかったとみえ

ます。どのようにして三木家はこの本を入手できたのでしょうか。

このことを探る手がかりとして、天保一〇年（一八三九）、通深が当時の懐徳堂の教授であった中井碩果からこの本を借用した旨を伝える手紙が残っています。碩果は竹山の孫にあたる人物です。通深は天保九年に父通明とともに上方各国を巡歴する旅をしており、その途中、懐徳堂で碩果に謁見し入門の礼を取っています。懐徳堂の門下生であった通深が教授碩果から直接本を借りたのです。『東征集』の出版が確認できるのは嘉永六年（一八五三）ですが、通深はこの本を写本で所持していました。小竹が『東征集』の借用を願った年代は不詳ですが、同本の出版以前とみてよく、市井にはまだ流通していなかったのです。

三木家は中井家、あるいは懐徳堂の稀少な本を入手できる関係性を有していたわけです。この他にも通深が中井家より本を借りていた記録が『福崎町史』第四巻にいくつか掲載されています。なかには門外不出の秘蔵書を借りようとして断られている事例まであります。通深は熱心に中井家関係本を蒐集していたのです。そして、小竹のように三木家と懐徳堂の関係性をあてにして本を借り

来る人もいたのです。

本の借り主、木村藤一郎

もう一人、三木家に本を借りにきた人物を紹介します。木村藤一郎という人です。彼は一二月六日付の手紙で三木家から借用していた『英城記』と『河野家譜』について役務が多忙のため写しきれず、借用の延長を願ひ出ています。どちらも三木家のルーツにまつわる書物で、これも同家特有の蔵書といえます。また藤一郎は同じ手紙の中で「中井履軒経説之著述類」を拝借したいと願ひ出ています。履軒は竹山の実弟にあたる人物ですが、藤一郎は借用を希望する理由を「当地中井家之著述類一向無之」と述べており、中井家関連本が当時この地域では入手しにくかったことがわかります。

「観生堂蔵書目録」をひらくと、竹山の著作として有名な『草茅危言』や『逸史』のほか、履軒や中井竹山の子中井蕉園の著作など、多くの中井家関連本が目につきます。播但地域で学問を志す者たちの間で、三木家は中井家の学問に触れる貴重な経路として大きな意味をもったのです。

さて、この木村藤一郎という人物は何者なのでしょう。彼の正体を知りうる史料があります。江戸時代、広大な幕府領支配を任されたのは全

国各地に派遣・配置された代官たちですが、その代官に従事する役人たちを総覧した『県令集覧』という史料をみると、木村藤一郎の名が生野代官所地役人として確認できます。

生野代官所は銀山運営を管轄する幕府の重要拠点であったため、主たる代官所構成員の他に現地登用した役人を特別に置くことを認められていました。それが地役人です。木村藤一郎は天保一〇年には竹原野口役（銀山に出入りする人の検問や鉱物の搬出入の警備番役、竹原野口を担当）を務めており、嘉永元年（二八四八）以降は地役人の中でも最上位の役職である御運上蔵役を務めていたことが確認できます。

藤一郎は銀山運営の中核を担う一方で、学問の面にも秀でた人物でした。生野では天保一三年に出石藩の儒学者桜井東門の子桜井石泉を教授に招き、学問所尊性堂（のち麗澤館と改称）を開きましたが、木村藤一郎はこの学舎の助教を務め、翌一四年には教授に昇進しています。尊性堂には地役人や銀山運営を担った山師のほか、掛屋や郷宿など代官御用の請負人らとその子弟が集まり学問に励みました。いずれも生野銀山の行財政を担う存在で、尊性堂は学問・教養を身につけ、役務を担う人材を

育てる場として大きな役割を担ったのです。

生野地役人と三木家

以上にみたように、木村藤一郎は生野銀山の運営・学問振興の両面において中心的存在でした。彼はいかにして辻川村の三木家と関係をもつに至ったのでしょうか。その手がかりは藤一郎から通深宛ての別の手紙から読み取れます。三月二六日付の手紙の中で、通深は「今般も帰路伺候仕度」ところ、雨天の旅中にて訪問できなかつた旨を詫びています。

藤一郎は何らかの役務で辻川村付近を通行していたとみられますが、石川準吉著『生野銀山と生野代官』（日本工業新聞社、一九五九年）をみると、藤一郎の当時の動向を推定することができま

す。同書によると、木村藤一郎が「御銀登り」のため弘化三年（一八四六）三月一四日に生野を出発した記録があるといえます。「御銀登り」とは生野銀山で産出し製錬した灰吹銀を大坂の御金蔵へ輸送する役務のことです。地役人の重要任務の一つでした。辻川村は古来より生野から飾磨方面へ向かう交通の要衝です。辻川村周辺の支配を姫路藩に任された三木家宅には藤一郎のような「御銀登り」の生野地役人が度々来訪していたの

でしよう。

また同じ手紙の中で藤一郎は「県令転換前後吏務繁冗二而」と述べています。ここでの県令とは代官を指すので、つまりこの手紙が代官交替の頃のやりとりとわかります。日付から推測すると、県令転換とは弘化三年二月二八日、勝田次郎代官の入陣を指すとみられます。勝田代官について藤一郎は「跡県令も読書家と申尊二而、既二今般も彼是書物買入相成候、無程入陣二も可相成、何卒学問所一盛仕度岐望罷在候」と述べています。

江戸時代の代官は頻繁に交替があったことが知られていますが、代官の動向次第では業務内容やその地位の命運を左右される現地の地役人たちは、敏感に次期代官の品定めをしていたのでしよう。藤一郎にとって代官を評価する基準の一つが読書家か否かであったことは興味深い点ですね。

藤一郎の手紙は学問所や桜井家に関わる内容のものが多くですが、このほか三木家に残された手紙には出石藩の仙石騒動や近隣各地の火事発生など、世上の風聞や情勢にまつわる内容がよくみられます。三木家にとって諸人との交流は情報収集の意味もあつたのです。

読書でつながる点と線

三木家には藤一郎の他にも、渡辺角大夫、浅田州平、浅田大伍郎、小国幸助ら生野地役人との手紙が残されています。今回は木村藤一郎のものしか発見できませんでしたが、「御銀登り」のような役務を通して交流の機会を得た彼らは、その関係を私的世界まで広げ、本の貸借などの文化的交流を積極的に図っていたでしょう。

また三木家蔵書の大きな特色といえる中井家関連本の充実は、大坂の著名な儒学者や生野学問所の教授格の人物が三木家に本の借用を頼ってくる状況を生じさせていました。通深が懷徳堂との関係を積極的に活用し、形成した蔵書はそれほどの価値があったのです。懷徳堂から三木家、三木家からその学友へ、本は巡り、筆写されて広がっていきました。江戸時代の学者や文人は、彼ら自身が知の拠点として各地に点在し、それぞれが知的交流の線で結ばれていましたが、その線上を本が行き交っていたのです。

二 江戸時代の本屋の営み 姫路の本屋さん

ここまでみてきたのは貸借関係に基づく本の広まりでしたが、当然、

三木家は本屋からも本を購入していました。『福崎町史』第二巻・『姫路市史』第四巻にも取り上げられています。三木家が主に本を購入した店は姫路の本屋、灰屋でした。

江戸時代の出版業は一七世紀中頃から三都を中心に発展し、時代を経るにつれて地方にも広がりをもせたため、一九世紀にもなると全国各地の城下町等で本屋の営業が確認できるようにになります。通深の代に頻繁な取引がみられるのは姫路の灰屋長兵衛と名乗る本屋です。灰屋は一八世紀末〜明治初期まで営業活動が確認できます。出版のほか貸本業や古本売買、製本の受注や書画類・文具類の取扱いなど幅広く営業していました。行商も盛んに行っていて、その販路は播但二国をはじめ美作国津山方面にまで広がっていました。現



(挿図二) 襖下張り文書調査の作業風景 I

代ならば出版社、書店、古本屋は営業していますが、江戸時代の本屋は製作・流通・販売と、本に関わるあらゆる仕事を一手に担ったのです。

襖から覗く本屋の営み

灰屋の営業実態については先に紹介した二つの自治体史の叙述を除くと、ほとんど明らかにされていません。『福崎町史』に掲載された三木家から灰屋長兵衛に宛てた手紙は、灰屋の営業実態の解明に迫る上で第一級の史料といえますが、近年新たな史料が発見されました。

二〇一九年一〇月、三木家住宅のうち主屋以外が指定管理となり、宿泊・飲食施設にするための改修工事が行われることになりました。これに伴い副屋・離れの襖の下張り調査が実施されました。襖の下張りには反故となった古文書が再利用されることが多く、そこから江戸時代の貴重な史料が発見されることもあります。今行われた襖の下張り調査では三木家宛ての灰屋の手紙の断片が数点発見されました。この断簡から新たに判明した灰屋の営業実態をここでは紹介します。

本の世界の「交易」

まず紹介するのは弘化四年（一八四七）、『汪份増訂四書大全』をめぐるやりとりです。通深はこの本の売



(挿図三) 襖下張り文書調査の作業風景 II

却の相談を灰屋長兵衛（以下、「灰長」）にもちかけています。四書とは大学・論語・孟子・中庸の四つの書のことです。朱子学を興した朱熹によって重要視された儒学における代表的なテキストです。本書は清の汪份なる人物が増訂した四書の揃本で、八帙に及ぶ大部の本でした。四両二歩の売価にて三木家より相談をもちかけられた灰長は「同書は極上本ですが、もはや大学・中庸だけを分冊した和刻本も出来るほどに世間では四書は流通していて、いざれ唐本（中国で開版された本、和刻本より高価だった）でも価格が下落するでしょう」と市場の状況を説明し、買い手を見つけたら「最初で購入した本屋へ持って行き、値引きで引き取ってもらおうのはいかがでし

ようか」と続けています。

ここで興味深いのは、三木家が売り払いたい古本を灰長が買い取るわけではないという点です。あくまで買い手を探す仲介人として灰屋はこの一件に係わっているのです。その後の手紙をみると、『四書大全』は姫路では買い手が見つからず、大坂の本屋に掛け合つてやっと買い手を見つけたようです。しかし大坂の本屋は三木家の希望売価より安値を提示しており、灰長は「不利な交渉ではありませんが、他に買い手の見込みがないため、さっぱり見切りをつけて売ってはいかがでしょうか」と説得を試みています。

古本を単に買い取るのではなく、買い手の搜索や値段交渉もまた本屋の仕事だったのです。いわば本売りの仲介人のような商売を江戸時代の本屋はしていたわけです。

この点をさらに掘り下げて考えるべく、次に『漢魏叢書』をめぐる三木家と灰長のやりとりをみていきます。『漢魏叢書』は、明代に編纂された前漢・後漢代および魏晋南北朝時代の様々な著作を収めた漢籍叢書です。『福崎町史』第四巻には同本に関連して通深より灰長宛ての手紙が収録されていますが、今回の調査ではその返信にあたる灰長から三木家

宛ての手紙の断片を発見できました。両史料の内容を照合すると、ここでも通深が本の売払いを灰長に相談していた様子が詳細にうかがえます。

通深は『漢魏叢書』について「先日「交易本目録」の中に挙げていましたが、この書は不用になったため「交易」はせず売り払おうかと考えています。どこへでも結構なので二両にて売り払いたく思います」と述べています。

ここで「交易」という言葉が登場します。また「交易本目録」なるものを通深は灰長と共有していたとみられますが、この「交易」とはつまり本同士の交換のことです。

江戸時代、本屋間での商品仕入れの卸売り取引では「本替え」といって、現物交換で金銭の精算を代替する商慣習がありました。この事例の場合は顧客間での本の物々交換を灰屋が斡旋していたことになり、『四書大全』の事例も踏まえると、三木家は古本を手放すとき、すぐに金銭に換えてしまう場合と、交易本として出品し別の希望する本と交換する場合があったことになるのです。交換する本同士の間で価値に差がある場合、その差分を金銭で補っていたようです。

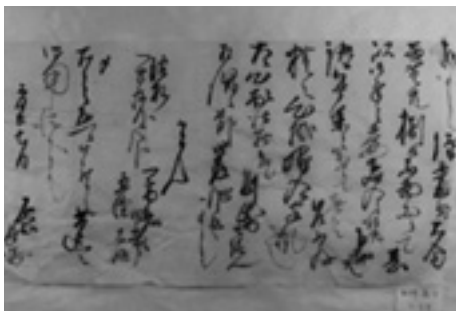
別の手紙をみると灰長が複数の書

名を挙げ、「これらは先日頂戴した「御交易被遊度御書付」に記された本のうち、この頃「払物」（古本）として出品されたものです。交易を

希望する場合は「替り本」（交換対象となる本か）を一部ずつ送ってください」と述べています。この叙述から推測すると、三木家側が入手したい本のリストが灰長には渡されていて、そのリスト上の本が古本市場に流れてきたとき、灰長は三木家にその情報をまわし購入を打診していたと考えられます。まさに本の「交易」です。江戸時代の本屋は本の交易仲介人という一面をもっていたのです。

本の「嫁入り」

以上、江戸時代の本屋の営みについて、三木家と灰屋のやりとりの中からみてきました。最後にもう少し



(挿図四) 調査で発見された古文書の断筒

『漢魏叢書』のゆくえを追って、この文章を閉じたいと思います。

『漢魏叢書』はなかなか買い手が見つからなかったようです。先ほどのやりとりの続きとみられる手紙で灰長は『漢魏叢書』について「決して等閑みなせうにしているわけではないが、精々がけて「嫁入り」を探しており「す」と述べています。また別の手紙でも「昨秋より探している漢魏叢書について所々へ尋ねていますが、すぐには「嫁入り」できそうにありません」と述べています。灰屋は日頃から取引のある大坂の本屋、秋田屋、大右衛門にも掛け合いましたが、値段交渉が上手くいかなかった旨を三木家に伝えていきます。本に買い手がつくことを「嫁入り」と称しているのです。

本は人から人へめぐり、様々な読者の手を渡ります。顧客から別の顧客へ、本の売買を取り次いだ江戸時代の本屋は仲介人なこうどのようなはたらきをしたのです。売りに出した本が別の人の手に貰い受けられていくさまは、元の所蔵主や本屋にとって、さながら「嫁入り」のように感じられたのでしょうか。今回見つけた史料では迎むかえられませんでしたが、『漢魏叢書』の嫁入り先が無事見つかったことを願いたいものです。

田原地区の小字(いざね)について

田原小学校六年 田 畑 駿



◆『小字』について調べたきっかけ

多くの住む田原地区は、辻川や田尻など、さまざまな地区に分かれています。その地区の中には小字というより小さな地区のようなものがあると聞きました。それはどのようなものなのか、いくつあるのかなど、興味を持ち詳しく調べてみることにしました。

◆小字とは？

小字とは、市区町村の大字をさらに細かく分けた地域のこと。大字は人びとのくらしのまとまりからなりたっていることが多いのに対し、小字は、田畑や山林のような土地のまとまりを単位としていることが多いそうです。

田原地区の小字にはどんなものがあるかを調べようと思いい図書館に行

きました。小字の書かれた地図はありませんでした。そこで役場に聞いてみました。色々調べてもらった結果、農林振興課に小字を記した地図があり、見せてもらえることになりました。

でも、その地図は、持ち出しやコピーが禁止されていたので、4時間かけて地図から拾い上げてメモをしました。

それをもとに作り上げたのが次の地図です。小字の一覧表と一致させながらシールを貼っていくのにとっても苦労しました。

◆小字と漢字

小字の一覧表を見ていると、次のような漢字がよく使われていることに気がきました。

- ・ 田や畑
- ・ 方角(東西南北)
- ・ 地形に関するもの(山や川)
- ・ 位置関係(上下、中、内、裏)
- ・ 面積に関するもの(反)

小字が土地のまとまりをあらわしているということがよく分かりました。

◆気になる小字を訪れてみた

また、小字を見ていると、どうしてこんな小字が付いたのだろうと興味を引くものがたくさんありました。そこで、現地に行ってみたらヒントになるものが見つかるかもしれないと思つて取材に行くことにしました。いくつかを紹介します。

三四 川ノ上

川と関係がある川と思つていましたが、予想通り、雲津川がありました。その地域の中では川上にあたるころだと思えます。



六八 八王寺

八王寺(子)という地名は全国にあり、八人の王子をまつる信仰の広がりの中で地名として定着していったそうです。



そこには何もありませんでした

昔は、八王子をまつる祠のようなものがあつたのだと思います。

九一 境

何の境にある場所か気になつて行ってみました。やはり、長目の南端で香寺との境になる場所だと思えました。大門地区にも境という小字があります。



百 薦淵ノ上

「薦」という字は「こも」と読み、イネ科の植物のことをいいます。「むしろ」の材料になつていたそうです。



昔は水の湧き出る淵に薦が生えていたところだったのでしよう。

一三五 狐谷

思った通り、狐が出てきそうな山に面したところでした。



昔は、人をだます狐があらわれた場所だったのかもしれない。今もいるのかな。

一六四
ミロカ堂

とても小さい範囲の小字。お堂があるのかと行ってみましたが、何もありませんでした。

お父さんの推測では、弥勒菩薩をまつるお堂があったのではとのこと。ミロクがミロカに転じたのかなと思います。

一八九

佐近屋敷

佐近という人が佐近という位の人に住んでいたのだと思います。

屋敷はありませんでしたが、池の中に灯籠が立っていました。何か関係があるのかもしれませんが。



◆大門の「〇〇新開」

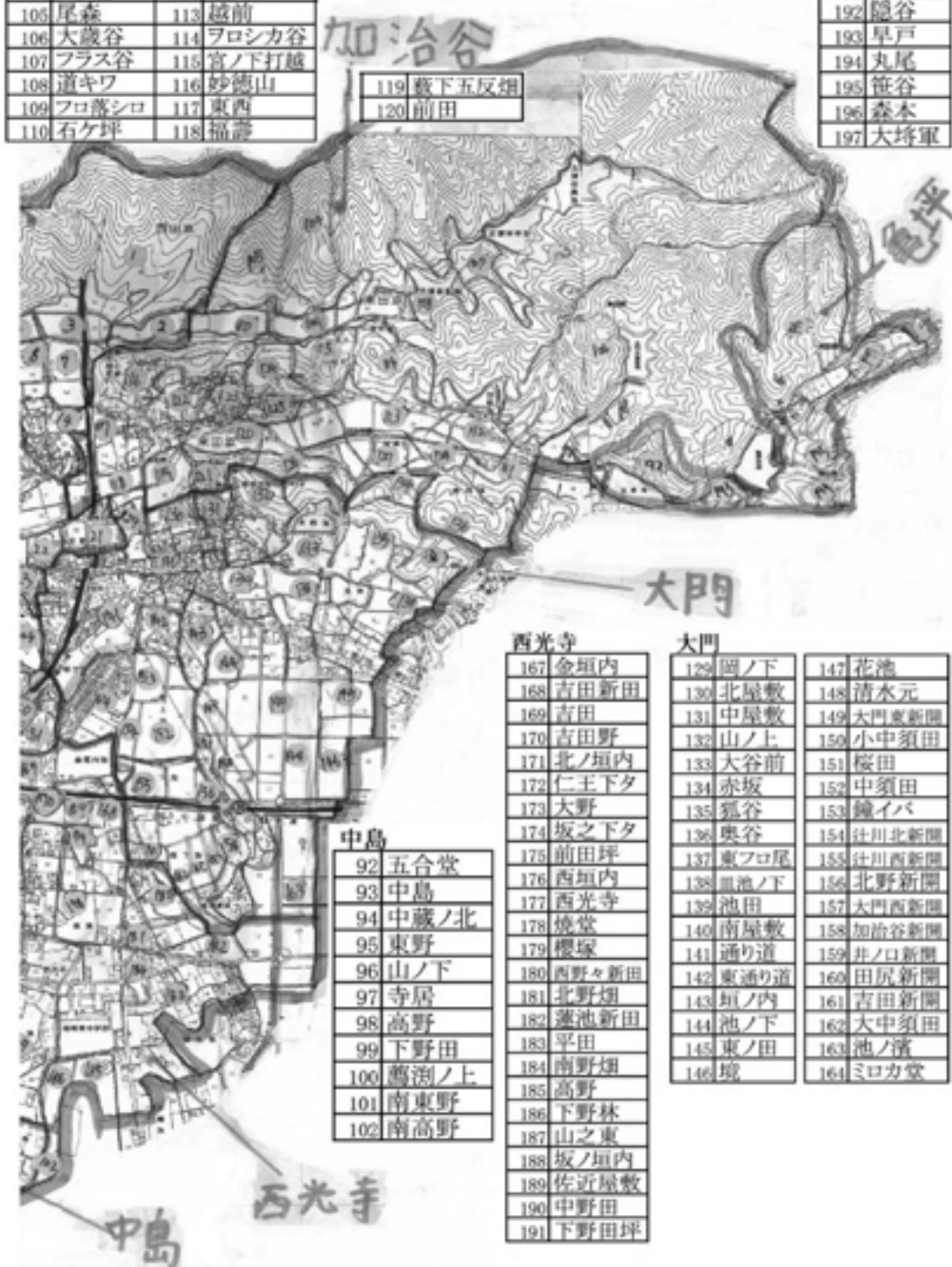
辻川新開・辻川西新開・北野新開
大門西新開・加治谷新開・井ノ口新開
開・田尻新開・吉田新開

加治谷

103	北浦谷	111	大谷口
104	カラ谷	112	垣内田
105	厚森	113	越前
106	大蔵谷	114	ヲロシカ谷
107	フラス谷	115	宮ノ下打越
108	道キワ	116	妙徳山
109	フロ落シロ	117	東西
110	石ケ坪	118	福壽

魚坪

192	隠谷
193	早戸
194	丸尾
195	笹谷
196	森本
197	大塔軍



119	蔵下五反畑
120	前田

中島

92	五合堂
93	中島
94	中蔵ノ北
95	東野
96	山ノ下
97	寺居
98	高野
99	下野田
100	蕨池ノ上
101	南東野
102	南高野

西光寺

167	金垣内
168	吉田新田
169	吉田
170	吉田野
171	北ノ垣内
172	仁王下夕
173	大野
174	坂之下夕
175	前田坪
176	西垣内
177	西光寺
178	徳堂
179	櫻塚
180	西野々新田
181	北野畑
182	蓮池新田
183	平田
184	南野畑
185	高野
186	下野林
187	山之東
188	坂ノ垣内
189	佐近屋敷
190	中野田
191	下野田坪

大門

129	岡ノ下	147	花池
130	北屋敷	148	清水元
131	中屋敷	149	大門東新開
132	山ノ上	150	小中須田
133	大谷前	151	桜田
134	赤坂	152	中須田
135	狐谷	153	鐘イバ
136	奥谷	154	辻川北新開
137	東フロ尾	155	辻川西新開
138	黒池ノ下	156	北野新開
139	池田	157	大門西新開
140	南屋敷	158	加治谷新開
141	通り道	159	井ノ口新開
142	東通り道	160	田尻新開
143	垣ノ内	161	吉田新開
144	池ノ下	162	大中須田
145	東ノ田	163	池ノ濱
146	境	164	ミロカ堂

不思議なことに、他の地区の名前の付けられた「○○新開」という小字が、大門地区に集中して八か所もありました。

新開とは新たに開くという意味で、開拓地や新田地に付けられることが多いそうです。実際に訪れてみると池ばかりでした。近くには西光寺野台地開発の歴史を説明した看板もありました。

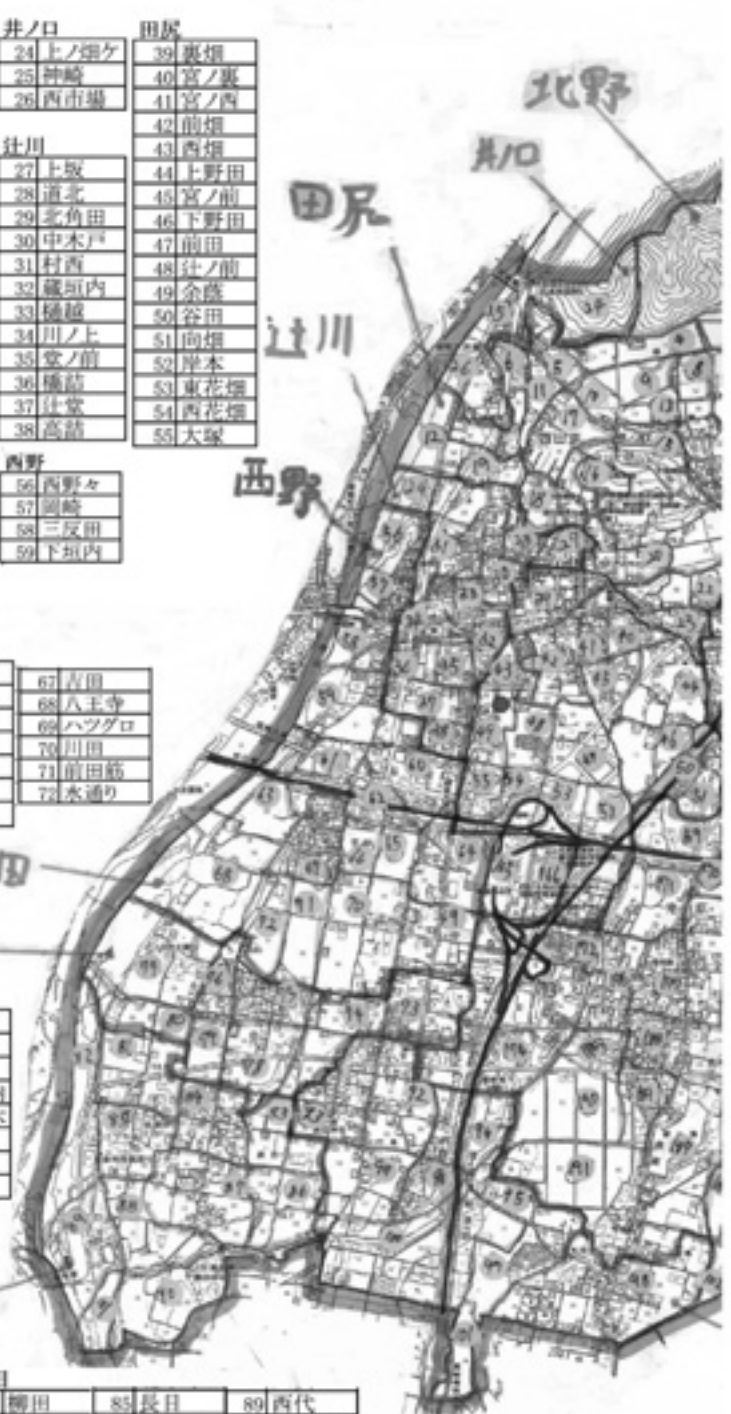
これらの池は台地の上にあります。だから、水を引いたり、水を流したりするといった、池と関係する地区の名前を付けているのかなと思います。



◆まとめ

今回の調査で、田原地区にはとてもたくさん的小字があることが分かりました。小字はその土地の地形や特徴から名付けられているものが多

北野	井ノ口	田原
1 中ノ谷	24 上ノ畑ケ	39 裏畑
2 塚ノ下	25 神崎	40 宮ノ裏
3 穴田	26 西市場	41 宮ノ西
4 東保喜山		42 前畑
5 西保喜山	辻川	43 西畑
6 東市場	27 上坂	44 上野田
7 寺山西	28 道北	45 宮ノ前
8 東新田	29 北角田	46 下野田
9 東廣畑	30 甲木戸	47 前田
10 西廣畑	31 村西	48 辻ノ前
11 クロ垣内	32 蔵垣内	49 余藤
12 三恩	33 橋坂	50 谷田
13 西新田	34 川ノ上	51 向畑
14 小谷	35 堂ノ前	52 岸本
15 北廣岡	36 廣岡	53 東花畑
16 茶野山	37 辻堂	54 西花畑
17 上大明寺	38 高崎	55 大塚
18 下大明寺	西野	
19 北西	56 西野々	
20 西廣岡	57 岡崎	
21 向上廣岡	58 三反田	
22 向下廣岡	59 下畑内	
23 掛上り		
165 西水田	吉田	
166 甲水田	60 橋川	67 吉田
	61 北西	68 八王寺
	62 東角	69 ハツダロ
	63 西ノ甲	70 川田
	64 大塚	71 前田筋
	65 ナコザ	72 水通り
	66 丁田	
	八反田	
	73 東田	
	74 岸ノ上	
	75 蔵ノ木	
	76 西ノ垣内	
	77 神東ノ木	
	78 前田	
	79 八反田	
	80 寺ノ裏	
	長目	
	81 柳田	85 長目
	82 川原	86 下向イ田
	83 上向イ田	87 南中才
	84 北中才	88 大塚
		89 西代
		90 下野畑
		91 塚



いと思いますが、全く由来が分からない小字もありました。

長い年月の間で読み方が変わったり、音だけで伝わってきた小字に後から漢字が当てられたりして、一見すると意味が分からなくなっていることが理由として考えられます。

小字が名付けられた本当の理由が分かれば昔の福崎町の様子も分かるのだろうと思います。小字には歴史がいっぱい詰まっていると思います。これからも小字の由来を探っていきたいと思います。

小字の由来を考えながら田原地区

の色んな場所を取材していると、何だかタイムスリップしているような気持ちになりました。

第九回福崎町柳田國男ふるさと賞 小学生低中学年の部 受賞

絶景 春日山城

田原小学校四年 西牧宗佑



◆はじめに

ぼくは城が大好きです。家の人に頼んで全国各地の城を見に行っています。天守閣の残る城はカッコいいですが、最近では、城跡にも興味をもってきていました。そんな時、福岡町にも春日山城という山城があったことを聞き、どんな城だったのか詳しく調べてみようと思いました。

◆春日山城

まず、春日山城について調べました。図書館には思ったような資料がなく、姫路の城郭資料センターに行くと、係の人に探してもらいました。いくつかの資料が見つかり、春日山城の基本的なことがわかりました。その内容は次の通りです。

・所在地 福崎町八千種

- ・別名 飯盛山城
- ・標高 一九七・八メートル
- ・築城期 建武年間（一三三四～一三三六）南北朝時代
- ・築城者 後藤三郎左衛門尉基明
- ・城主 後藤氏
- ・形態 連郭式山城

◆城主後藤家の歴史

次に築城者の後藤基明と城主の後藤家について、資料をもとにまとめてみました。

後藤基明は、鎌倉時代末期に赤松円心のもとで、足利尊氏による室町幕府の成立に貢献したそうです。その後、赤松氏が播磨の守護職となり、基明も春日山城を構えることになりました。その後、後藤家は播磨地方で活躍しますが、豊臣秀吉の播磨征伐により、一五七八年に落城してしまいました。

約二百年もの間、この福崎町に城があったことを知ってワクワクした気持ちになりました。

大まかな後藤家についての歴史は

次の通りです。

- ・藤原利仁の流れをくむ公則が、後藤を名乗ったのが始まり。
- ・鎌倉時代末期、後藤基明は郎等を率いて上京、後醍醐天皇につく。
- ・赤松円心が挙兵し京へ。円心幕下につき、六波羅軍を攻撃する。
- ・赤松氏が播磨守護職となり、基明は、春日山城を構える。
- ・基明は、春日山城主として播州で活躍する。
- ・戦国時代の秀吉の征伐によって春日山城が落城する。（一五七八）

春日山城主基信の弟基国の子（基次）を黒田官兵衛が養育し、後に後藤又兵衛となる。

又兵衛は、夏の陣において伊達政宗の軍との戦いで討死した。

◆春日山に築城した理由

春日山城や基明などのことを調べたうえで、現地に取材に行きました。春日山城が作られた南北朝時代の城は、ほとんどが山の地形を生かした山城です。

登ってみて、基明は次のような理由で春日山に城を築いたのだろうと思います。

- ・急斜面で岩もあって、とても攻めにくい。
- ・頂上から周りを見渡せて、海まで

見え、敵が攻めてきたらすぐに発見できる。

春日山は築城するのにとても適した山だと感じました。

大阪城や姫路城のように、町の中心に築城されるようになるのは織田信長や豊臣秀吉以降のことです。

◆工夫された春日山城

昔の道とは違いかもかもしれませんが、登ってきた道は、道幅は広いけど、馬にはせまそうなの、ちょうどいい広さだと思いました。また、敵にわなを仕掛けられそうなのもありません。

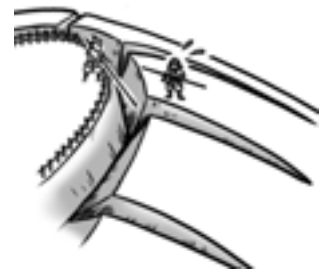
頂上には食料貯蔵庫だけは案内がありました。戦の時には、食料がとても大切になります。敵に襲われたりしないように食料貯蔵庫に向かう道もよく考えて作られていると思うので、ぼくが登ってきた道は裏道かもしれません。

山頂から観察していると、掘の跡



のようなどころも2か所見つけました。

堀を囲んだ水堀を思い浮かべますが、山城の場合、山を縦に削って敵の横の動きを封じるためのものです。



また、曲輪（くるわ）の跡らしいものもたくさん見つけましたが、はつきりしたものではありませんでした。

曲輪は、城を区画するもので、石や土でできています。城の中心的な役割をする本丸を守るために、本丸の周りに作られます。敵の侵入を防ぐために工夫して配置されていたはずです。

◆春日山城の想像図

春日山城の取材を終えて、春日山城がどんな城だったかを考えてみることにしました。多くの城の知識やこれまで見てきた城を参考にして考えていきました。

春日山城の山頂は二段になっています。低い方の段に曲輪をたくさん作り、そこから敵を攻撃します。

上の段の中央には城の中心となる本丸を置き、周りを二の丸や三の丸

で囲んで本丸を守ります。四方に櫓（やぐら）も建てて、しっかりと見張りもします。こうしてできあがったのが下の図です。

◆まとめ

調べているときに、

ほくのひいおじいちゃんの名は「後藤」だと聞きました。春日城をつくった後藤家の家紋



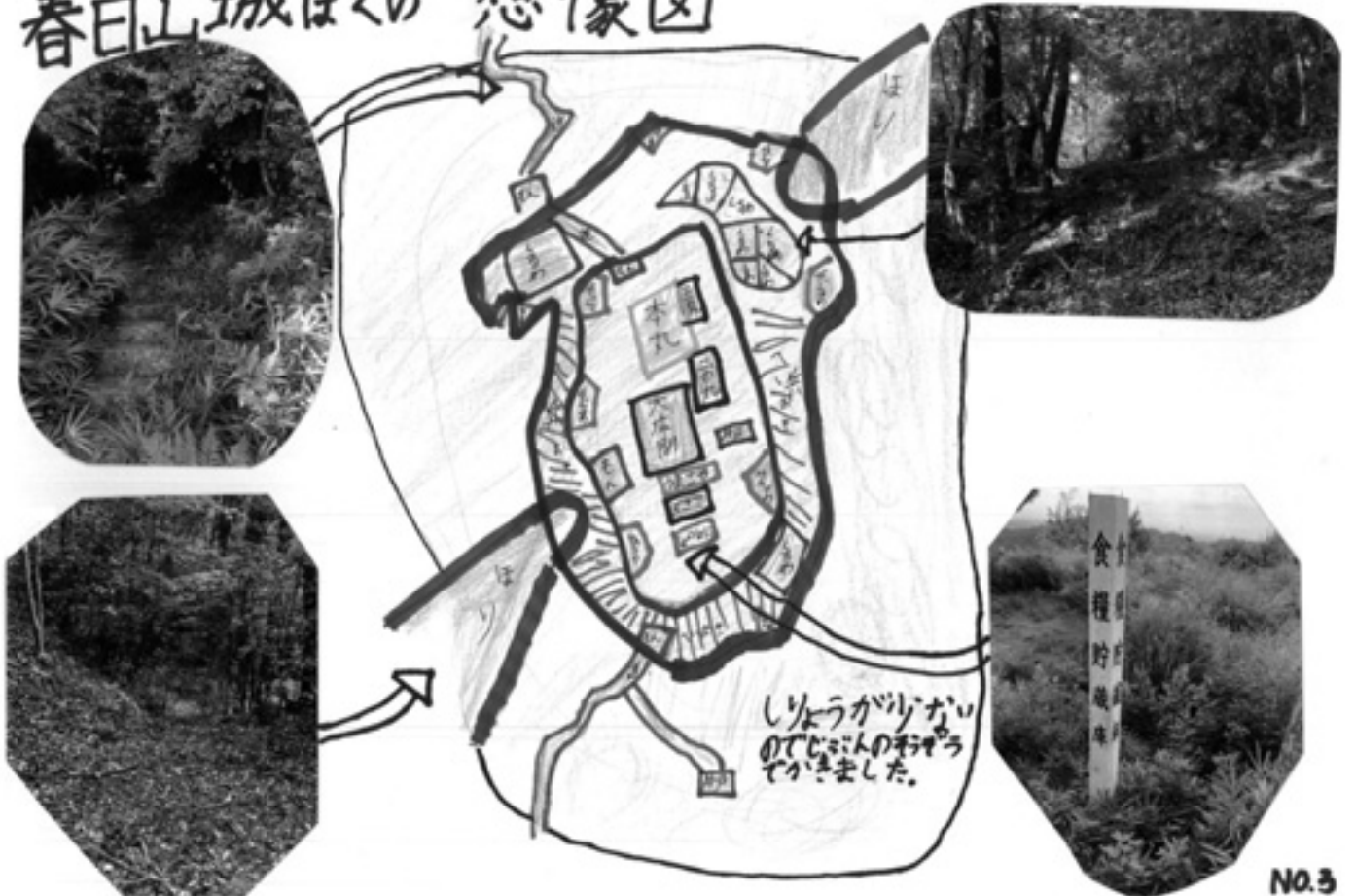
とも同じでした。どこかでつながっていると思うとドキドキしました。

今回、春日山城のことを調べましたが、城好きのほくにとっては、とても楽しい調査でした。想像図を作るときは、自分が城主になったような気持ちでした。

今回の調査を通して、こんなに近くに歴史のつまった春日山城があることを、もっと多くの人に知って欲しいと思いました。そして、春日山城に登って、春日山城からの絶景を見て欲しいと思います。



春日山城ほくの想像図



第九回福崎町柳田國男ふるさと賞 中学生の部受賞

新町天満宮について

福崎西中学校二年 岡本祝子



一 はじめに

私が住む新町地区には天満宮がある。新町天満宮には昔から変わらず『なで牛』があったり、梅の木が植えられていたりしている。

新町天満宮の歴史が気になり、ふるさと学習を通して色々なことを調べることになった。

二 天満宮について

・そもそも『天満宮』とは？

菅原道真（すがわらのみちざね）を祭神とする神社のこと。『てんま

ぐう』や『天神（てんじん）さん』と呼ぶこともある。

道真が参



菅原道真

詣した大將軍社の前に突如マツが生え靈光を放ったと聞いた村上天皇が、天歷三（九四九）年に境内に道真をまつたところからはじまる。

・日本で特に有名なところは？

- ★太宰府天満宮（福岡県）
- ★北野天満宮（京都府）
- ★大阪天満宮（大阪府）
- ★防府天満宮（山口県）
- ★湯島天満宮（東京都）

道真への尊敬が深まるとともに、全国各地に“天満宮”が広まった！

『天満宮』の『天満』の名は道真が死後に送られた神号『天満（そらみつ）大自在天神』から来たんだって！

三 新町天満宮の現地調査

実際に新町天満宮へ行って写真を撮ることにした。



天満宮の表側



天満宮の裏側

・入り口付近にある『狛犬』について

狛犬とは、ライオンや犬に似た日本の獣で、想像上の生物。魔よけとして置かれている。

〈口を開けている理由〉

よく見ると、右側の狛犬は口をあけているけど、左側の狛犬は口をし



左側の狛犬



右側の狛犬

めている。この口元は、「阿吽（あうん）」の形を示している！

「阿吽」の「阿」は口をあけて、「阿吽」の「吽」は口をしめて発音するから、口の形に違いがある。右の狛犬の台座の「奉」と左の狛犬の台座の「献」で「奉献」と読める。↓神様にたてまつるという意味！

・灯笼について

天満宮の前には一列に灯笼が並べられていた。

この灯笼は、文字通り「灯」の「籠」であり、灯が風などで消えないように囲まれたもの。新町天満宮の灯笼は石でできているので「石灯笼」と呼ばれている。



・井戸について

天満宮の右手側には井戸がある。深さは約二メートルほどで、水も入ってなくとても浅い。



〈天満宮などに井戸がある理由〉

日本では古くから井戸は信仰の対象であったため天満宮や多くの神社に井戸がある。井戸の地下水脈は長い年月をかけて地球のエネルギーを吸収していると考えられているため、それを汲みあげて生活用水としていた。昔の人は「井戸には大きなパワー、聖なる力が宿っている」と考えていた。↓そのため、井戸を解体する場合はお祓いされることが多い！



・なで牛について

天満宮の左手側には「なで牛」がある。大きい牛と白い小さい牛の二頭がいる。牛の頭や鼻に十円玉や五円玉がよくのっけていて、牛をなでる人が多くいる。
〈なで牛とは〉



自分の身体の悪いところや具合の悪い部分をなでたあと、その牛の同じ部分をなでると悪いところが牛に移って病気が治るといふまじないのこと。



邪気を人形にうつして祓い、心身を清めるといふこと。ちなみに病氣や邪気が治るだけでなく幸運にも恵まれるという言い伝えもある。
〈なぜ牛なのか〉
道真が深く牛を慈しんでいたから。

・学問の神様「二宮金次郎」の像について

新町天満宮には学問の神様である二宮金次郎の像もある。
〈二宮金次郎の歴史〉

江戸時代、農家に生まれた二宮金次郎は日々の生活が大変貧しく、仕事をしてお金をかせぎながら勉強に励んだというエピソードがある。



〈二宮金次郎と天満宮の関係〉

二宮金次郎の歴史から分かるように、薪を背負って本を読んでいる有名な姿は、そのような話を反映されているものとして描かれている。努力を重ねることの大切さを象徴した「学問の神様」として多くの人々から親しまれ、祀られている。

・梅の花について

天満宮には梅の花が並べて植えてある。これは菅原道真が梅をこよなく愛していたから。



梅の花は一月下旬〜四月下旬にかけて咲くものが多い。

・拝殿に納められた「絵馬」について
拝殿にあがって天井側にはいろいろな絵馬が納められている。自分で数えてみると全部で十一枚!!
〈それぞれの絵馬の歴史〉

一枚目



平成23年1月に納められた絵馬。天満宮の世話をした方々の名前が書かれている。世話人が決まっているそうだが一番新しい。

二枚目



馬に乗った人の姿が描かれている。多分道真。昭和14年1月に描かれたもの。

三枚目



すごく昔に描かれているため、絵の色が落ちてしまっている。よく見ると左側に道真?らしき姿の人と、右側に道真の手下らしき人が描かれている。

四枚目



竜の絵。平成元年12月に描かれたもの。描かれた方と奉納者の名前が書かれている。

五枚目



昭和51年5月に奉納された。世話人の名前が書かれている。

六枚目



平成27年1月に世話人が奉納されたもの。

七枚目



昭和63年1月に世話人が奉納されたもの。

八枚目



平成4年10月に世話人が奉納されたもの。

九枚目



平成21年1月に世話人が奉納されたもの。

十枚目



光で見えなかった。

十一枚目



大正5年10月に世話人が奉納されたもの。

※写真はすべて七月二十九日に撮影した。

四 おわりに



・新町天満宮について、
調べてみて、
絵馬や井戸
などの古く
から言い伝
えられてき
たものが多
く、天満宮
について多くの歴史が知れてよ
かった。
・狛犬やなで牛は、もっと調べ
たら歴史や言い伝えなどを知れ
ると思う。もし調べたり、話を
聞いたりする機会があれば、も
っと詳しいことが知りたいと思
った。
・絵馬を調べたり写真を撮るの
が難しかった。
・昔から住んでいて、天満宮は
家に近いのでよく小さいころ遊
んでいたの、天満宮について
よく知っているつもりでいたけ
ど、いざ調べてみると全く知ら
なかったことや、詳しくは知ら
なかったことなどがこのふるさと
学習を通して知ることができ
て自分にとってとてもよい機会
となった。

公民館クラブ会員募集

公民館クラブは、住民が生
涯を通じて趣味や教養に自主
的に取り組む団体です。
現在、文化センターや八千
種研修センターなどを拠点に
コーラス、吹奏楽、書道、ち
ぎり絵、パッチワーク、パソ
コン、短歌、俳句、英会話
中国語教室、将棋、囲碁など、
多数のクラブが活動され、定
期的に公民館で発表されてい
ます。



各クラブは、それぞれで会
員を募集しています。知識・
技術を習得したい、その成果
を地域へ還元したい、活動を
通じて友人を増やしたい、等

と思われる方は是非、挑戦し
てください。

また、新たにクラブを作っ
て活動したい方も要件さえ満
たせば、文化センターなどの
施設を有利な条件で利用でき
ます。是非お問い合わせくだ
さい。
問い合わせ先 公民館クラブ
事務局（文化センター内）
2213755

※表紙の写真※

表紙の絵は、松岡映丘作『稚
児文殊』の画稿で、福崎町立
柳田國男・松岡家記念館に所
蔵されています。

稚児文殊とは、学業向上や
合格祈願の願いを叶えること
で有名な文殊菩薩が、純真な
子どもの姿で表現されている
図像のことです。

編集後記

たくさんの方々のご協
力により、福崎町文化第
三十八号を発刊することが
できました。寄稿いた
だいた皆様、校正等にご
協力いただきました皆様
に厚くお礼申し上げます。